本と地域の情報誌
県北 どらくろあ
第117号　2025年12月1日（毎月1日発行）

木次（きすき）線ストロール⑯

幡屋（はたや）駅

「たたら製鉄の痕跡と諏訪から里帰りの神」

11月16日日曜日、午前8時40分頃、車で庄原の自宅を出た。朝晩の冷え込みで周囲は深い霧の中、ライトを点けて走った。まるで山水画の中に迷い込んだような気分だ。

徐々に霧が晴れてくると、紅葉した彩（いろどり）の世界が見えてくる。山々は晩秋の景観だが、刈り取られた稲の切り株からは藁（わら）が青々と伸びている。それも標高がどんどん上がるにつれて次第に黄葉して、真っ青な空の下、渓谷沿いの山の中を走行する。

（すごいな……）

圧倒されていた。長引いた残暑からの急激な冷え込みで、紅葉の山景としては今が最高の時期なのだろう。カメラや三脚を抱えた人影がチラホラ見える。

出雲大東駅に行く前に、以前に訪問した赤川の川原を目指したが、どういうわけか水位が上がってカモの群れが泳いでいる。庭木に水やりをしていた人に尋ねると、堰の鉄板が自動で開閉するのだという。ここしばらく雨が降っていないので、堰が閉じて水位が上がっている。防火用水も担っているので、ある程度の水位を保つ必要がある、とのこと。

前回で採取した石が鉄滓（てっさい）ではなかったため、元の川原に戻すつもりが、川面に投げ込むことになってしまった。近くで農作業をしていた人に、不法投棄ではない理由を説明してから投下。

出雲大東駅の駐車場に車を停めた。日曜日なので、駅の構内の飲食店も出札窓口も閉じている。少し早いが、ホームのベンチで待つことにした。持参した文庫本を読む。熱中しているうちにホームのベルが鳴った。客車が2両で、観光客でかなり混んでいる。運賃を用意しておこうと、運転席横のモニターを見てようやく気づいた。備後落合方面の列車に乗ってしまった。

190円の料金を支払って南大東駅で降車。携行のぶどうパンで簡単な昼食。11時58分発（実際は15分遅れ）の宍道行に乗る。結果オーライで、予定の列車に乗ることができた。出雲大東駅からは赤川沿いの線路を走り、10分足らずで幡屋駅に到着、料金は190円。地方のローカル線では致命的なミスだが、少し長く列車に乗り、ほんのちょっぴり売上に貢献することができた。本を読むので待ち時間は少しも苦にならない。

南大東駅と同じで駅舎はなく、屋根のある簡易な待合室があるだけ。以前は木造の駅舎があったようだが、平成6年に解体されて現在の停留所（待合室）が作られた。待合室の後ろに広い空地があるので、おそらく駅舎があった跡地な

前方が開けた田園でのんびり寛げる

赤川の下流域なので川原には丸い石が多い

発行：どら書房

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会